

九州天皇家論 7章 吉野の宮

九州天皇家の都

“花散らふ秋津の野辺に”

吉野の宮に幸しし時、柿本人麿の作る歌(万葉集巻1-36)

やすみしし わが大王の 聞し食(め)す 天の下に 国はしも 多(さは)にあれども 山川の
清き河内と 御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷(ふとし)きませば
百礫城(ももしき)の 大宮人は 船並めて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆるこ
となく この山の いや高知しらす 水激(たぎ)つ 滝の都は 見れど飽かぬかも

反歌

見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の 絶ゆることなく またかえり見む

吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に

人麿は「吉野の国」、「秋津の野辺に」と歌っている。「秋津(蜻蛉)」とは神武天皇が国見をして「蜻蛉の砥簀め」と感想を述べて故事に由来する。「秋津」とは竹馬川の流れである。吉野川とは竹馬川である。人麿が詠った「吉野の國」とは小倉南区である。

秋津の野辺に 宮柱 太しきませば

竹馬川の河口に「吉野宮」があった。吉野宮はいわば水の宮であった。

水激つ 滝の都は

(1) 「水激つ滝の都は」と詠っているがこの意味がこれがなかなか難しい。私たちは、今、吉野と云えば奈良・吉野を思い浮かべる。だがそこには「水激つ」という言葉が持つ水はない。「水激(たぎ)つ」といかなる意味か。万葉頭注36は「水がさかまき流れる」と解説している。これは一般的な滝のことではない。同じように吉野の白浪を詠った歌がある。

(2) 万葉313番歌

み吉野の 滝の白波 知らねども 語りし継げば いにしへ思ほゆ

昔より話には聞く吉野の川の白波は見たことはないが、語り継がれて、今、聞くと、昔を思い出す。

ここでは、「滝(たぎ)の白波」と詠んでいる。「滝(たぎ)」は「激」である。人麿の「水激つ」と同じ意味で使っている。逆巻く水の流れは白波をたてて流れている。これが九州天皇家の吉野の川の姿であった。

(3) 竹馬川が九州天皇家の吉野川である。ところが実際に竹馬川を見た感想をいうと「吉野の川の白波」という程の激流ではない。いや、それどころか、私が見た時は夏だったせいもあるかもしれないが、水量は少なく、流れと云うほどの流れすらありませんでした。「水激(たぎ)つ」という描写とあまりにもちがうのでがっかりしたものでした。納得がいかない川でした。

長い間の疑問でした。この竹馬川がなぜ「見れど飽かぬ 吉野の川」と賞賛される川なのか。川の流れる程、奇妙に流れている。でもそれが神武天皇が戦時にもかかわらず見学に訪れた理由なのか。人麿が「またかえり見む」と切望したような川なのか。竹馬川は本当に吉野の川なのか……。

疑問を解くヒントがHPの記事にありました。やはりこの川のことをよく知らなければなりません。竹馬川は周防灘から潮とぶつかって遡く川だった。これこそが「水激(たぎ)つ」である。竹馬川は「水がさかまき 流れる」川だった。竹馬川が流れ来る。そこへ満潮時、周防灘から潮が遡ってきて激しくぶつかる。確かに小倉南区曾根の海は干満の差が激しい。川と海が衝突して白波が逆巻く。水が逆巻き流れる。これが人麿ら九州天皇家の人々が見た吉野川の姿であった。

見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の 絶ゆることなく またかえり見む

と人麿が詠った川であった。



竹馬川 小倉南区 [2008/09/27]

唐戸大橋から上流の眺めです。かつてこの近くに、竹馬川を上る潮を防ぐため唐戸(水門のこと)が設けられました。すぐ上流に唐戸橋があります。唐戸橋を通る道は旧中津街道です。この橋の左手に、かつては下曾根宿がありました。唐戸橋に重なって見えますが、上流に栄橋があり、県道門司・行橋線が通り、下曾根駅前を經由して南下します。その上流にJR日豊本線が通っています。

(homepage2.nifty.com/kitaqare/albu04.htm -)

大宮人は 船並べめて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る

- (1) この川のイメージは“大河”である。奈良吉野の宮滝付近の河は大河ではない。奈良・吉野の宮は川の側である。歩いて行く場所である。また奈良吉野の川も船を出して渡る河ではない。岩づたいに歩いて渡ることができる。人麿の歌の川は大河である。「朝川」「夕川」と船で渡ると歌われた大河は竹馬川である。
- (2) しかし、この歌詞は大河の特定以上の深い意味を持っている。「吉野の宮」は大宮と詠われている。「大宮」とは離宮ではない。吉野の大宮は天皇個人の宮(私邸)と異なり、公の宮、つまり、王朝の政庁だったのである。今でいう官庁である。
- (3) 「大宮人は 朝川渡る」、この目的も明らかである。当然出仕である。仕事のために「大宮」に向かっている。そして、「夕川 渡る」とは当然、帰宅のためであろう。夕べに、帰宅のため急いで川を渡っているのである。この描写は政庁への出仕・帰宅の風景である。「花散らふ」と歌っているものですから奈良・吉野山の花見のイメージを重ねてしまうが全く異なる。人麿歌の「大宮」は、奈良・宮滝の離宮ではなく九州天皇家の大宮(政庁)であった。



竹馬川（九州天皇家の吉野川）河口

2008年夏、この地を訪問しました。国道25号線からはずれて、田んぼの中の道を進むと、「吉田太陽の丘公園」があります。その公園の南側に竹馬川が流れています。吉野宮はほぼこのあたり、と想定して、「綿都美神社」の裏手の丘「吉田にれの木坂」に登って、竹馬川を見下ろしました。視線を東に向けると海が見えます。陸上自衛隊曾根訓練場の側を通り、車がやっと通ることができる狭い堤防に沿って進むと、そこは葦が生い茂り、荒れた河口でした。護岸の堤防が続き、人が行き来する様子はありません。殆ど忘れ去られた場所ですが、堤防に登って見ると思いがけない眺望が開けました。

竹馬川の流れは周防灘に注ぐ。人麿のもう一つの歌出雲娘子の歌を読みましょう。ここにも吉野の川が詠われている。

萬葉集3-429 溺れ死にし出雲娘子を吉野に火葬る時、柿本朝臣人麿の作る歌二首
山のまゆ 出雲の子らは 霧なれや 吉野の山の 嶺にたなびく
八雲さす 出雲の子らが 黒髪は 吉野の川の 沖になづさふ

この歌の情景はこうであろう。

吉野の川で「出雲の娘」が溺れ死んだ。その子は、霧なのか。吉野の山にたなびいている。古来、足立山は、響灘と周防灘からの湿った風の通路に位置して、雲がかかることが多いので「霧ヶ岳」とも呼ばれた山である。

山のまゆ 出雲の子らは 霧なれや……………この山の気象をよく言い表している。

黒髪は 吉野の川の 沖になづさふ……………吉野川(竹馬川)の沖は周防灘である。

娘は河口近くまで流されたのであろう。河口といってもそんなに離れてはいない。奈良・吉野では吉野と吉野川河口(和歌山市)は遠く離れる。歌の作歌場所を奈良・吉野とすると吉野で溺れた娘が紀ノ川河口で発見されたということになる。これでは離れすぎである。

出雲の娘は小倉南区曾根の海で水難に遭った。彼女の黒髪は竹馬川の沖に漂っている。沖は周防灘である。ではなぜ「出雲の娘」が小倉南区の吉野まで来ていたのか。小倉南区が出雲王朝の都だったからである。出雲の娘にとっては小倉南区曾根の海は故郷の海である。小倉南区にあった出雲國の娘が吉野川(竹馬川)に泳ぎに来て、可哀想に水死してしまった。火葬の煙が吉野の山(足立山)に昇っていく。すべてこの地域での話である。間然する所がない。

足立山（九州天皇家吉野の山）



吉野の宮は 大宮 (政庁)」

吉野の宮とは何か。まとめてみよう。

- (1) 吉野とは小倉南区・竹馬川の河口の葦野をいった。人麿が「秋津の野辺」と詠った「吉野の宮」は小倉南区に存在した。
- (2) 吉野の宮は持統天皇の宮と普通理解されている。しかし、持統天皇が吉野宮を造ったという記録はない。吉野の宮は持統朝以前から存在した。吉野の宮は応神紀にすでに登場している。応神の時代から歴代王朝の中心的な宮、伝統的な宮が「吉野の宮」であった。いわば九州天皇家官庁だった。吉野の宮のイメー

ジは一新されなければならない。

- (3) 何故、九州天皇家の「大宮(政庁)」が小倉南区に存在したのか。小倉南区の歴史的意義を理解しなければならない。九州天皇家が歴史を刻んだ土地は奈良ではなく小倉南区だった。神武天皇が蜻蛉の交尾の姿に似ていると形容したのは竹馬川である。神武天皇は激戦の末この地を手いれた。以来小倉南区は九州天皇家の都であった。
- (4) 人麿は「百磯城(ももしき)の 大宮人は」と詠った。人麿は吉野の宮は大宮人が通勤する政庁だ詠った。大宮人は朝出勤して、夕方帰宅した。奈良・吉野の宮は離宮である。そこに大宮人が朝夕出勤することはない。ところが人麿が詠った吉野の宮は政庁だった。
- (5) 「百磯城(ももしき)の 大宮人」はどこに住んでいたのか。
人麿は大宮人は川を船で渡って吉野の宮に出仕したと詠う。一体、通勤手段に船を使うとはどのような地形なのか。何故徒歩でないのか。この情景は吉野の宮を小倉南区に定めて初めて理解できる。吉野の宮の対岸は曾根、津田、朽網である。大宮人はここに住居を構えていたのである。ここから船で曾根の海を渡り、大宮に出仕し、又帰宅したのである。この通勤路は海上である。故に船を使ったのである。
- (6) 神武建国以前も小倉南区は歴史の表舞台だった。古代の二人の王がこの地について賞賛している。
伊弉諾尊……………日本は浦安の國 (日本は穏やかな入り江が多く存在する國だ。)
大国主命……………玉垣の内つ國 (周囲を美しい山々に囲まれた國だ。)
伊弉諾尊も大国主命も小倉南区を自分の領土としていた。この地は伊弉諾尊から大国主命へ。そして神武へと続く九州天皇家の都だった。

小倉南区・吉田が吉野

元明和銅六年(713年)、中央官命に基づいて地方各國庁で「風土記」が筆録編述されている。その命令事項の一番が「郡郷の名(地名)には好字(漢字二字の嘉き字)を著ける」である。

これは不思議な命令である。今までの地名を別の地名に変えよという命令である。何のために「郡郷」の名を変更せよというのか。では今までの名前のどこがいけないのか。考えれば謎の多い命令である。

郡郷とはどの國の郡郷なのか。元明政権が遍述を命じた「風土記」は九州天皇家の風土記である。九州に存在した九州天皇家の祖国、神武が建国した祖国の郡郷の名前を変更せよと命じたのである。

この詔勅の真意は何か。この問いには九州天皇家の歴史が深く関わる。今はただこの詔勅を受けて、この地の國庁はどう対応したか、考えてみよう。

九州の行政官は頭をひねったであろう。

……さて、新しい名前を何としよう。しかし、古来地名にはそれぞれ理由がある。「吉野」は、古より、伝統の「吉野」である。その「吉野」と全く関係ない名前をつけていいものであろうか。

「吉野」は今まで慣れ親しんできた地名、神武天皇以来、倭國の中心であった。また風土記にも記載された景勝の地である。名の全てを捨て去ることはできない。

……せめて、その名の一字を残して新しい名前としよう。「吉野」の「吉」を残し「吉田」としよう。

このように考えたに違いありません。名高い吉野の名前はこうして姿を隠し、吉野といえば奈良・吉野と誤認されることになった。小倉南区・吉田は九州天皇家・吉野の名残である。